

4 天界は二つの王国に分かれている

二〇 天界には無限の多様性があり、ある社会が他の社会と似ることはまつたくなく、ある天使でさえ他の天使と似ていないので、それゆえ、天界は、全般的に、特定的に、部分的に区別され、全般的には二つの王国に、特定的には三つの天界に、そして部分的には無数の社会に区別されます——個々のものについては今から述べます。

王国と言われます、天界が「神の王国」と呼ばれるからです。

二一 主から発出する神性をさらに内的に受け入れる天使とそれほど内的に受け入れない天使がいます。さらに内的に受け入れる者は天的な天使と呼ばれ、それほど内的に受け入れない者は靈的な天使と呼ばれます——これから天界は二つの王国に区別され、その一つは天的な王国、もう一つは靈的な王国と呼ばれます^{*2}。

二二 天的な王国を構成する天使は、主の神性をさらに内的に受け入れるので、内的な天使そしてまた高い天使と呼ばれます。ここから、彼らの構成する天界もまた、内的な天界そして高い天界と呼ばれます^{*3}。
高い、また低いと言われるのは、内的なものと外的なものはこのように呼ばれるからです^{*4}。

二三 天的な王国にいる者は、天的な愛と呼ばれる愛の中に、靈的な王国にいる者は、靈的な愛と呼ばれる愛の中にいます——天的な愛は主への愛であり、靈的な愛は隣人に対する仁愛です。

すべての善は愛に属します、なぜなら、ある者が愛するものは、これがその者に善であるからです。それゆえ、一つの王国の善は天的と呼ばれ、もう一つの王国の善は靈的と呼ばれます。
ここから、これらの二つの王国が、主への愛の善と、隣人に対する仁愛の善のように、互いに区別されることが明らかです^{*5}——主への愛の善は内的な善であり、その愛は内的な愛であるので、それゆえ、天的な天使は内的な天使であり、高い天使と呼ばれます。

*1 無限の多様性があり、他のものと同じものは何もない(七二三六、九〇〇二番)。

天界の中にもまた無限の多様性がある(六八四、六九〇、三七四四、五五九八、七二三六番)。

天界の中の多様性とは善の多様性である(三七四四、四〇〇五、七二三六、七八八三、七八五六、九〇〇二番)。そのことによって、天界の中のすべての社会は、また社会の中のそれぞれの天使は自分自身から相互に分かれている(六九〇、三三四一、三五一九、三八〇四、三九八六、四〇六七、四一四九、四三六三、七二三六、七八三三、七八三六番)。しかし、それでもすべての者は主からの愛によって一つのものとなつている(四五七、三九八六番)。

*2 天界は全体として天的な王国と靈的な王国の二つの王国に分かれている(三八八七、四一三八番)。

天的な王国の天使は主の神性を意志の部分に受け入れ、このように理解力の部分に受け入れる靈的な天使よりも内的に受け入れる(五一三、六三六七、八五二一、九九三六、九九九五、一〇一二四番)。

*3 天的な王国を構成する天界は、高いものと呼ばれる。けれども、靈的な王国を構成する天界は、低いものと呼ばれる(一〇〇六八番)。

*4 内的なものは高いものによつて表現され、高いものは内的なものを意味する(二一四八、三〇八四、四五九九、五一四六、八三五番)。

天的な王国の善は主への愛の善である、靈的な王国の善は隣人に対する仁愛の善である(三六九一、六四三五、九四六八、九六八〇、九六八三、九七八〇番)。

一四 天的な王国は、主の「祭司の王国」とも呼ばれ、みことばの中で「その方の住まい」と呼ばれます。また靈的な王国は、その方の「王の王国」と呼ばれ、みことばの中で「その方の王座」と呼ばれます——世でもまた、主は天的な神性から「イエス」と呼ばれ、靈的な神性から「キリスト」と呼ばれています。

一五 主の天的な王国の中の天使は、靈的な王国の中にある天使と比べて、知恵と栄光で大いにまぎつています。その理由は、その方への愛の中にいて、その方にさらに近く、さらに結合しているので、主の神性を内的に受け入れるからです。^{*6}

天的な天使がこのようであるのは、彼らが神的真理を直ちに生活の中に受け入れたから、また受け入れているからであり、靈的な天使のように、先に記憶と思考の中に受け入れるのではないからです。それゆえ、自分の心(cor)に書きつけた神的真理をもつており、あたかも自分自身の中に見るかのように、それらを知覚しており、決してそれらについて、「そうである、そうではない」などと推論しません^{*7}——彼らがどのようにあるか「エレミヤ書」に記されています、

わたしはわたしの律法を彼らの精神に与え、それを彼らの心に書き記す。……もはやだれも自分の友に、だれも自分の兄弟に、「エホバを知れ」と言つて、教えない。……彼らの最小の者から彼らの最大の者まで、わたしを知る(三一・三三、三四)。

また、「イザヤ書」に、「エホバにより教えられた〔者〕」(五四・一三)と呼ばれています。

エホバにより教えられた者が主により教えられた者であることは、主³自身が「ヨハネ福音書」で教えられています(六・四五、四六)。

一六 「神的真理を直ちに生活の中に受け入れた者、また受け入れている者は、他の者よりも知恵と栄光がある」と言われました。というのは、それらを聞くとすぐに、それらを意志し、行ない、記憶の中に蓄えてから、その後、どうなのかどうか、と考えないからです。

そのような者は、聞いたことが真理であるかどうかを、主からの流入によつて直ちに知ります。主は人間の意志することの中に直接に流入され、意志することを通して彼の考えることの中へ間接に流入されるからです。また同じことです、主は善の中に直接に流入され、善を通して真理の中に間接に流入されるからです。^{*8}なぜなら、意志

* 6 天的な天使は、靈的な天使に比べて計り知れないほど賢明である(二七一八、九九九五番)。

天的な天使と靈的な天使の間の相違はどんなものか(二〇八八、二六六九、二七〇八、二七一五、三三三五、三三四〇、四七八八、七〇六八、八五二、九二七七、一〇二九五番)。

* 7 天的な天使は、信仰の真理について、それらを自分自身の中に知覚しているので推論しない。しかし靈的な天使は、それらについて、そうであるか、または、そうでないか、と推論する(二〇一二、三三七、五九七、六〇七、七八四、一一二一、一三八四、一三九八、一九一九、三三四六、四四四八、七六八〇、七八七七、八七八〇、九二七七、一〇七八六番)。

* 8 主の流入は、善の中へ、善を通して真理の中へであつて、その逆ではない。このように、意志の中へ、それを通して理解力の中へであつて、その逆ではない(五四八二、五六四九、六〇二七、八六八五、八七〇一、一〇一五三番)。

*9

人間の意志は彼のいのちのエッセ(存在)であり、愛の善の容器である。また理解力はそこからのいのちのエキシステレ(実在)であり、信仰の真理と善の容器である(三六一九、五〇〇一、九二八二番)。

このように、意志のいのちは人間の主要ないのちであり、理解力のいのちはそこから発出する(五八五、五九〇、三六一九、七三四二、八八八五、九二八二、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇番)。

意志で受け入れられたものは、いのちに属すものとなり、人間に自分のものにされる(三一六一、九三八六、九三九三番)。

人間は意志とそこからの理解力から人間である(八九一二、九〇六九、九〇七一、一〇〇七六、一〇一〇六、一〇一一〇番)。

さらにまた、よく意志し、よく理解する者はだれでも他の者から愛され、尊重される。しかし、よく理解するが、よく意志しない者は退けられ、さげすまれる(八九一一、一〇〇七六番)。

さらにまた、人間は死後、彼の意志とそこから理解力のあつたままにとどまり、理解力に属す、同時に意志に属さないものは、その人間の中に存在しないので、その時、消える(九〇六九、九〇七一、九二八二、九三八六、一〇一五三番)。

二つの王国の間に、靈的な天的社會と呼ばれる天使の社會によつて、伝達と結合がある(四〇四七、六四三五、八七九六、八八〇二番)。天的社會を通して靈的な王国への主の流入について(三九六九、六三六六番)。

*10

に属し、ここから働きに属すものは善と言われますが、記憶に属し、ここから思考に属すものは真理と言われ——さらにまた、すべての真理は、意志に入るとすぐに善へ変えられ、愛に植えつけられるからです。それでも、真理が、記憶とそこからの思考の中にあるかぎり、善とはならず、生かれもせず、人間のものともなりません。人間は意志とそこからの理解力から人間であり、意志から分離した理解力からは人間ではないからです。^{*9}

二七 天的な王国と靈的な王国の間にはこのような相違があるので、それゆえ、彼らが一緒にいることも、互いの交わりもありません。靈的な天的社會と呼ばれる中間の天使の社會を通して、伝達が存在するだけです。その社會を通して天的な王国は靈的な王国へ流入します——ここからです、たとえ天界が二つの王国に分かれています、それでも一つとなっています。

主は常にこのような中間の天使を備えられ、彼らを通して伝達と結合があります。

二八 これら二つの王国の天使については、このあと多くのことを扱うので、ここでは個々のものは省きます。

5 三つの天界がある

二九 最内部のまたは第三の天界、中間のまたは第二の天界、最外部のまたは第一の天界、これら三つの天界があり、それらは互いに完全に分離しています。それらは互いに統いており、頭と呼ばれる人間の最上部、身体であるその中間部、足である最低部のように、また家の最上の部分、その中間の部分、その最低の部分のように存続します——主から発出し、下つている神性もまたこのような秩序の中にあります。この秩序の必然性から、天界は三つに分かれています。

三〇 人間の心(mens)とアニムス(外的な心)に属す内的なものもまた似た秩序の中になります。そこにも最内部・中間部・最外部があるのは、創造の時から人間の中に神的な秩序のすべてのものが授けられ、形の中で神的な秩序となり、ここから天界の最小の似姿となるようにされているからです^{*1}——それゆえ、人間もまた内的なものに関して天界とつながっています。そしてまた、世で生きたときに主から神的善と神的真理を受け入れたことにしたがって、死後、最内部の天界、または中間の天界、または最外部の天界の天使の間にやつて来ます。

三一 主から流入し、第三または最内部の天界で受け入れられる神性は、天的と呼ばれ、ここからそこの天使は天的な天使と呼ばれます。主から流入し、第二または中間の天界で受け入れられる神性は、靈的と呼ばれ、ここからそこの天使は靈的な天使と呼ばれます。けれども、主から流入し、最外部または第一の天界

で受け入れられる神性は、自然的と呼ばれます。しかし、その天界の自然的なものは世の自然的なもののようにではなく、それ自体の中に靈的なものと天的なものがあり、それゆえ、その天界は自然的な靈的な天界、自然的な天的な天界と呼ばれ、ここからそこの天使は自然的な靈的な天使、自然的な天的な天使と呼ばれます^{*2}。靈的な天界である中間または第二の天界から流入を受け入れる者は、自然的な靈的な天使と呼ばれます。天的な天界である第三または最内部の天界から流入を受け入れる者は、自然的な天的な天使と呼ばれますが——自然的な靈的な天使と自然的な天的な天使とに分かれていますが、それでも一つの段階の中にいるので彼らは一つの天界を構成します。

*1

人間の中に神的秩序のすべてのものが授けられており、人間は創造から神的秩序の形である(四二一九、四二三三、四五二三、四五二四、五一二四、五六八、六〇一三、六〇五七、六六〇五、六六二六、九七〇六、一〇一五六、一〇四七二番)。

人間のもので、その内なる人は天界の映像に、また外なる人は世の映像に形作られており、それゆえ、人間は古代人により小宇宙と言われた(四五三三、五一一五、六〇一三、六〇五七、九二七九、九七〇六、一〇一五六、一〇四七二番)。

このように人間は創造からその内的なものに関して、最大の映像にしたがって最小の似姿の天界であり、主から新しく創造されたまたは再生された人間もこのようである(九一一、一九〇〇、一九二八、三六二四、三六三一、三六三四、三八八四、四〇四一、四三七九、四五三三、四五二四、四六二五、六〇一三、六〇五七、九二七九、九六三三番)。

最内部・中間部・最外部の、または第三・第二・第一の、三つの天界がある(六八四、九五九四、一〇二一七〇番)。

さらにもう、善はそこに三重の順序で続く(四九三八、四九三九、九九九二、一〇〇〇五、一〇〇一七、一〇〇六八番)。最内部のまたは第三の天界の善は天的と言われ、中間のまたは第二の善は靈的、最外部のまたは第一の善は自然的靈的と言われる(四二七九、四三八六、四九三八、四六三九、九九九二、一〇〇〇五、一〇〇一七、一〇〇六八番)。

三一 それぞれの天界に内なるものと外なるものがあります——その内なるものにいる者は内なる天使と呼ばれ、そこの外なるものにいる者は外なる天使と呼ばれます。

それぞれの天界の中の外なるものと内なるものは、人間の意志とその理解力のように振る舞います。内なるものが意志で、外なるものが理解力です——すべての意志は、それ自身の理解力をもつており、一方なしにもう一方は存在しません。比べれば、意志は炎のようであり、その理解力はそこからの光のようです。

三二 天使の内的なものが、天使をある天界の中かまたは他の天界の中にいるようにしていることは、よく知つておかなくてはなりません——内的なものが主へ向けて開かれていればいるほど、彼らはますます内的な天界にいるからです。

三つの内的な段階は、天使と同じく靈にも、また人間のそれぞれの者にもあります。最内部の天界にいる者には、第三の段階が開かれています。中間の天界にいる者には第二の段階、また最外部の天界の中には第一の段階だけが開かれています。

内的なものは、神的善と神的真理を受け入れるのにしたがつて開かれます——神的真理に感動し、それらを直ちに生活(いのち)に、したがつて意志とそこからの行動に取り入れた者は、最内部のまたは第三の天界にいて、真理の情愛から善を受け入れるのにしたがつてその天界の中にはいます。けれども、真理を直ちに意志の中に入れないので、記憶とそこから理解力の中に入れ、そのことから意志し、それを行なう者は、中間のまたは第二の天界にいます——しかし、道徳的に生き、神的なものを信じていて、教えられようとそれほど思わない者は、最外部のまたは第一の天界にいます。^{*3}

ここから、内的な状態が天界をつくること、また天界はそれぞれの者の内にあつて、その外にないことを明らかにすることができます。主もまた次のように言つて、教えられています、

神の王国は目に見えてやつて来るのではありません、「見よ、ここを」、「見よ、そこを」と言うものでもありません。というのは、見よ、神の王国はあなたがたの中にあります(ルカ一七・二〇、二一)。

三四 すべての完全さもまた、内的なものに向けて増大し、外的なものに向けて減少します。内的なものは神性に近く、本質的にさらに純粹です、けれども、外的なものは神性から遠く、本質的にさらに粗悪であるからです。^{*4} 天使の完全さは、知性・知恵・愛、そしてすべての善の中にあり、ここから幸福の中にあります、けれども、それらのない幸福の中にはありません。なぜなら、それらのない幸福は外なるものであり、内なるものではないからです。

*3 人間の中に天界と同数のそれだけ多くのいのちの段階があり、死後、彼のいのち(生活)にしたがつて開かれる(三七四七、九五九四番)。

天界は人間の中にある(三八八四番)。

ここから、世で天界を自分自身の中に受け入れた者は、死後、天界にやつて来る(一〇七一七番)。

*4 内的なものは、神的なものに近いので、さらに完全である(三四〇五、五一四六、五一四七番)。

内なるものの中には数千また数千のものがあり、それらは外なるものの中で共通の一つのもののように見える(五七〇七番)。

人間が外なるものから内的なものに向けて上げられれば上げられるほど、それだけ光の中に、したがつて知性の中にやつて来る。その高揚は、雲から明るさの中へ上がるようなものである(四五九八、六一八三、六三三三番)。

最内部の天界の天使の内的なものは、第三の段階に開かれているので、それゆえ、彼らの完全さは、内的なものが第二の段階に開かれている中間の天界の天使の完全さに、計り知れないほどまさっています。同様に、中間の天界の天使の完全さは、最外部の天界の天使の完全さにまさっています。

三五 このような相違があるので、ある天界の天使が他の天界の天使のところに入ることはできません、すなわち、ある者が低い天界から上ることや、高い天界から下ることもできません——低い天界から上る者は、苦痛を感じるほどの不安に襲われ、その者を見ることも、まして彼らと話すこともできません。高い天界から下る者は、自分の知恵を奪われ、声はつかえ、絶望します。

天界が天使の内的なものから構成されることをまだ教えられていなかつた最外部の天界の者がいました。その者は、ただ上方の天使の天界に入るだけで、そこの天界の幸福に入れるだろうと信じていました。「そこで」彼らの間に入ることを許されました、しかし、そこに行つたとき、どれほど搜しても、だれも見つけ出せませんでした。それでも大群衆がいたのです。その到着者の内的なものは、そこの天使の内的な段階にまで開かれていないので、それゆえ、視覚も開かれていたからです。間もなく、自分のいのちがあるのか、ないのか、ほとんどわからないほどの心の苦悶に襲われました。そのために、急いでそこから、これまでいた天界へ戻り、自分の仲間の間に来て、喜び、もう自分のいのちに一致しないような高いものを探まないと約束しました。

さらにまた私は、高い天界から降ろされ、自分の天界がどんなものであつたかわからなくなるようにまでも自分の知恵を奪われた者を見ました。

しばしばあることですが、主がある者を低い天界から高い天界へ、そこの栄光を見せるために上げられるときは異なります。その時、彼らは最初に準備され、仲介する天使に囲まれて、彼らを通して交わります。これらから、それらの三つの天界は互いに完全に分かれています。

三六 同じ天界にいる者は、そこのだれとも交わることができます、しかし、交わりの快いものは彼らの中の善の類似性にしたがつています——しかし、このことについては、あとの章の中で述べます。

三七 たとえ、ある天界の天使が他の天界の天使と交際を結ぶことができないよう天界が分かれていますが、それでもやはり主はすべての天界を直接と間接の流入によって、すべての天界の中へご自分からの直接の流入によって、またある天界から他の天界の中へ間接の流入によって、結合されています。^{*5} こうして、三つの天界が一つであり、すべてのものが“最初のもの”から最後のものまで結びつきの中にあり、結びつかないものが

*5 主からの流入は、ご自身からの直接のもの、そしてまたある天界を通して他の天界への間接のものがある。人間のもとの内的なもののへの流入も同様である(六〇六三、六三〇七、六四七一、九六八二、九六八三番)。

主からの神的なものの直接の流入について(六〇五八、六四七四、六四七八、八七一七、八七二八番)。

靈界を通つて自然界への間接的な流入について(四〇六七、六九八二、六九八五、六九九六番)。

*6 すべてのものはそれ以前のものから、このように「最初のもの」から存在するようになり、同様に存続する、存続は絶え間のない存在であるから。それゆえ、ばらばらのものは存在しない(三六二六、三六二八、三六四八、四五二三、四五二四、六〇四〇、六〇五六番)。

何も存在しないようになつていています。中間の媒介するものを通して“最初のもの”と結びつかないものは、存続しないで、散らされ、無となつてしまします。^{*6}

三八 段階に関する神的な秩序がどのようにあるか知らない者は、どのように天界が分けられているか、内なる人と外なる人とは何かでさえ、理解することができます。

世の中の大多数の者は、内的なものと外的なものについて、または上にあるものと下にあるものについて、純粹なものから粗悪なものへと続く連續性かまたは結合の緊密性のような概念しかもつていません。しかし、内的なものと外的なものは連続していないで、別ものです。

二種類の段階があります。連續の段階と非連續段階です。

連續の段階は、光が炎からその不明瞭なものにまで減少するような段階です。または視覚が光の中にあるものから陰の中にあるものにまで減少するような段階、または大気の純粹さが最低のものからその最高のものにまで至るような段階です。隔たりがこれらの段階を決定します。

〔2〕しかし、連續でなく分離の段階は、前のものと後のもののように、原因と結果のように、生み出すものと生み出されるもののように区別されます——全世界の中のすべてと個々のものを調べる者は、その中に、どんなものであれ、産出と合成の段階があることを知るようになります。一つのものからもう一つのもの、またもう一つのものから第三のもの、このようにさらについたようになります。

〔3〕これらの段階を知覚しない者は、各天界の相違も、人間の内的な性質と外的な性質の相違も、靈界と自然界の相違も、人間の靈とその身体との相違も、決して知ることができません。それゆえ、対応するもの

と表象するものが何であり、どこからなのか、また流入がどんなものかも理解することができます。感覺的な人間は、これらの相違を把握していません、この段階に従う連續するものもまた、増大し、減少するからです。それゆえ、彼らは靈的なものを自然的なものが純粹になつたものとしか考えることができん——それでまた、彼らは知性から離れて、その外にいます。^{*7}

三九 最後に、三つの天界の天使について、あるアルカナ(秘義)を記すことが許されています。段階について理解しなかつたので、以前にはだれの心の中にも入つてきることのないものです——すなわち、それぞれの天使、そしてまたそれぞれの人間のとに、最内部のまたは最高の段階、または最内部のものとある種の最高のものがあり、その中に主の神性が最初にまたは最も近く流入して、そこから、そのもとに継続する秩序の段階にしたがつて他の内的なものを配列することです。この最内部のものまたは最高のものは、天使や人間へに入る“主の入り口”、そして彼らのもとのまさに“主の住居”そのもの、と呼ばれることがあります。

*7 内的なものと外的なものは連續していない、しかし、別々の、分離した段階にしたがつており、それぞれの段階にその境界がある(三六九一、五一二四、五一四五、八六〇三、一〇〇九九番)。

あるものは他のものから形作られ、こうして形作られたものは、連續的に、さらに純粹にまたさらに粗悪になつたものではない(六三二六、六四五五番)。このような段階にしたがつて内的なものと外的なものが分離していることを知覚しない者は、内なる人と外なる人も、内的な天界と外的な天界も、把握できない(五一四六、六四六五、一〇〇九九、一〇一八一番)。

この最内部のものまたは最高のものによつて、人間は人間であり、獸から区別されます、なぜなら、獸はないからです。ここから、人間は、動物と異なつて、心(mens)とアニムス(外的な心)に属す内的なものすべてに關して、主により、主ご自身へと上げられることが、その方を信じること、その方に愛を感じること、こうしてその方を見ること、また知性と知恵を受け入れること、また理性から話すことができます。永遠に生きることもまたここからです。

けれども、主によりその最内部に何が配列され、備えられるかは、天使の思考を超えており、その知恵を上回つてゐるので、天使のだれかの知覚の中へ、はつきりと流入することはありません。

四〇 さて、以上が三つの天界について全般的なものですが、特にそれぞれの天界については、あとで述べます。

6 天界は無数の社会から成る

四一 それぞれの天界の天使は、一つの場所に一緒にいるのではなく、彼らの中にある愛と信仰からの善の相違にしたがつて、大小の社会に分かれています。似てゐる善の中にいる者は、一つの社会を作ります。

天界の中の善は無数に変化しております、それぞれの天使は自分自身の善のような存在となつています。^{*1}

四二 天界の中の天使の社会もまた、全般的にまた特定的に、善が相違するように、互いに離れてゐます。なぜなら、靈界の中の距離は、内的な状態の相違から、ここから天界の中では愛の状態の相違から生じ、それ以外の他の源泉からは生じないからです。相違の大きい者どうしは遠く離れ、相違の少ない者どうしは、離れ方も少なくなっています。類似性が一緒であるようにして います。^{*2}

*1 無限の多様性があり、あるものは決して他のものと同じではない(七二三六、九〇〇二番)。

天界の中にもまた無限の多様性がある(六八四、六九〇、三七四四、五五九八、七二三六番)。

天界の中の多様性は、無限であり、善の多様性である(三七四四、四〇〇五、七二三六、七八三三、七八三六、九〇〇二番)。

これらの多様性は、多數の真理によつて存在するようになり、そこからそれぞれの善がある(三四七〇、三八〇四、四一四九、六九一七、七二三六番)。

それゆえ、天界の中のすべての社会は、また社会の中のそれぞれの天使は、お互いに自分自身から分かれている(六九〇、三二四一、三五一九、三八〇四、三九八六、四〇六七、四一四九、四二六三、七二三六、七八三三、七八三六番)。しかし、それでも、すべてのものは主からの愛を通して一つとして働く(四五七、三九八六番)。

四三 一つの社会の中でも、すべての者は同様に互いに離れていました——さらに完全な者は、すなわち、善に秀てる者は、したがつて愛・知恵・知性に秀てる者は中央にいます。秀ることの少ない者は、周囲におり、完全さの減少に応じた段階にしたがつて遠く隔っています。

このことは、光が中央から周辺へ減少するようなのです——中央にいる者は、最大の光の中にもいます。周辺へ向かつて、そこの者たちの光は、だんだんと少なくなっています。

四五 似た者はあたかも自分自身からかのように似た者へ導かれます。なぜなら、似た者と一緒のときは自分自身と一緒にいるようなもの、また、その者は自分の家にいる者のようですが、似ていない者と一緒にいるときは他人と一緒にいるようなもの、また、その者は外にいる者のあるからです——似た者と一緒にいる時、自分自身の自由の中にもいて、それゆえ、いのち「生活」のすべての快さの中にいます。

四六 さらにまた、善が天界の中のすべての者を交わらせ、その性質にしたがつて区別していることが明らかです——しかしそれでも、互いに交わらせるのは、天使ではなく、善の源であられる主です。その方が彼らを導き、彼らを結合させ、彼らを区別し、善の中にいるかぎり、彼らを自由の中に保たれ、このようにそれぞれの者を自分自身の愛のいのち「生活」・自分の信仰・自分の知性と知恵の中に、ここから幸福の中に保たれます。^{*3}

ささらにまた、善で似ている者はすべて、この世での自分自身の親族・自分の姻戚・自分の友のように完全にお互いを、たとえ以前に彼らを決して見たことがなくとも知っています。その理由は、来世では親族関係・姻戚関係・友情は靈的なものであり、したがつて愛と信仰に属するもの以外の何ものでもないからです。^{*4}

このことを私は、身体から引き出されて靈の中にいた時、こうして天使との交わりの中にいた時、ときどき知らされました——その時、私に、彼らの中のある者が子供時代から知っている者のように、しかし、他の者は完全に知らない者のように見えました。私が子供時代から知っている者のように見えた者は、私の靈の状態と似た状態の中にいた者でした。けれども、私が知らなかつた者は、異なつた状態の中にいました。

*2 天界のすべての社会は、いのちの状態の相違にしたがつて、このように愛と信仰の相違にしたがつて不变の位置にある(一二七四、三六三八、三六三九番)。

距離・位置・場所・空間・時間について、来世での、すなわち、靈界での驚くべきこと(一二七三、一二七七番)。

*3 人間は愛することを自由に行なうので、すべての自由は愛と情愛に属す(一八七〇、三一五八、八九八七、八九九〇、九五八五、九五九一番)。

八九二二、二八八六、二八九〇、二八九一、二八九二、九〇九六、九五八六、九五九一番)。

自由は愛に属するものなので、それゆえ、それぞれの者のいのちとその快さである(一八七三番)。

自由からのものでないなら、何もプロプリウム(自己)のものとして見られない(二八八〇番)。

主により導かれるることはまさに自由そのものである、善と真理の愛により導かれるからである(八九一、九〇五、二八七二、二八八六、二八九〇、二八九一、二八九二、九〇九六、九五八六、九五九一番)。

天界の中のすべての近縁・親類・姻戚・血族のようなものは、善から存在し、その適合(似合い)と相違にしたがつて(六八五、九一七、一三九四、二七三九、三六一二、三八一五、四一二一番)。

四七 一つの天使の社会を形作るすべての者は全般的に似た顔をしていますが、しかし、個別には似ていません。

全般的な類似と個別的な変化がどのようにあるかは、世の中のそのようなものからいかく把握することができます——各氏族にはある種の全般的に似たものが顔と目にあり、それによつて他の氏族から区別されることが知られています。さらに、ある家族は他の家族から区別されます。そして、このことは天界でははあるかに完璧なものとなっています、天界ではすべての内的な情愛は見られ、顔から輝き出ています、顔は情愛の外なる形や表象するものであるからです。天界では自分の情愛以外の他の顔を持つことはありません。

さらにまた、全般的な類似が、一つの社会の中にいる個々の者の中で特にどのように変化するかも示されました——天使のような顔が私に見られ、その顔が、一つの社会の中にいる者の善と真理の情愛にしたがつて変化しました。長い間、その変化は続き、そのとき私は、全般的に同じ顔が舞台のように持続し、残りのものはそこからの單なる派生するものと伝播するものであることを——このようにさらにまたこの顔によつて、社会全体の情愛が示され、情愛によつてその者の顔が変化することを認めました。なぜなら、前述したように、天使の顔は自分の内的なものの形であり、このように愛と信仰に属す情愛の形であるからです。

四八 さらにまたここから、知恵ですぐれている天使は、他の者がどのような者であるかを顔から見分けます。だれもそこでは、顔つきで、内的なものを隠し、偽ることはできず、狡猾さや偽善で、装い、欺くことはまったくできません。

何度も「天使の」社会の中へ偽善者が入り込んだことがありました。その者は自分の内的なものを隠し、外的

なものをその社会の中にいる者の善の形に見えるように作り上げることを、このように光の天使を偽り装うことを使え込んでいました。しかし、この者が長い間そこにとどまることはできません、というのは、内なる痛みが始まり、苦しんで、顔は鉛色になり、あたかもいのちを奪われるかのようになります——このように変えられるのは、対立するいのちが流入し、働きかけるからです。それゆえ、自分と似た者のいる地獄へ自分自身を急いで投げ落とし、もはやあえて上ることをしません。

これらの者が、招待されて食事の席についている者間で、婚礼の衣装を着ていないのを見つけられ、外の暗やみに投げ出された者によつて意味されます(マタイ二二・一一以降)。

四九 天界のすべての社会は互いに伝達し合います。開かれた交流によつてではあります、というのは、自分の社会から他の社会へ出て行く者は少ないからです。なぜなら、社会から出て行くことは、自分自身からまたは自分のいのちから出て行くことであり、このように他の適合しないものの中に移るようなものであるからです。それでも、すべてのものは、それぞれのいのちから発出するスフェアの拡大によつて伝達します——いのちのスフェアとは情愛のスフェアであり、愛と信仰に属するのです。このスフェアは周囲の社会へ遠く、横へ、情愛が内的で完全であればあるほど、それだけさらに遠く、さらに横へ広がります。^{*5}

天使の知性と知恵はその拡大にしたがつています——最内部の天界の中にいる者は、またそこの真ん中にいる者は、全天界へ拡大するスフェアを持っています。ここから、天界のすべての者にはだれとも伝達があり、だれにもすべての者との伝達があります。^{*6}

のですが、そのとこで、さらにまた、天使の知恵と知性についてのとこで、さらに十分に述べます。なぜなら、情愛と思考のすべての拡大は、その形にしたがつて進むからです。

五〇 天界の中に大小の社会があることは前述しました。大きいものは数万の天使から、小さいものは数千の天使から、最小のものは数百の天使から構成されます。

さらにまた、いわば家ごとに、家族ごとに、孤立して住んでいます。これらの者は、たとえそのよう広がつても、それでも社会の中にいる者と同じように配列されています、すなわち、彼らの賢い者は真ん中に、単純な者は辺境にいます——主の神的な導きの近くにいる者は、天使のうちで最良の者です。

*5 靈的なスフェアは、いのちのスフェアであって、それぞれの人間・靈・天使から流れ出て、彼らを取り囲んでいる(四四六四、五一七九、七四五五、八六三〇番)。

それは彼らの情愛と思考のいのちから流れ出る(三四八九、四四六四、六二〇六番)。それらのスフェアは、善の性質と量にしたがつて天使の社会の中へ遠く広がっている(六五九八、六六一二、八〇六三、八七九四、八七九七番)。

*6 天界的な愛はそのすべてのものを他と共有するので、すべての善は天界の中に伝達して存在する(五四九、五五〇、一三九〇、一三九一、一三九九、一〇一三〇、一〇七一三番)。

7 それぞれの社会は小さい形の天界であり、 それぞれの天使は最小の形の天界である

五一 それぞれの社会が小さい形の天界であり、それぞれの天使が最小の形の天界であることは、愛と信仰の善が天界をつくるものであり、その善が天界のすべての社会の中に、社会のすべての天使の中に存在するからです。その善がどこかで相違し、変化しても決して重要なことではありません、やはり天界の善です。相違は、ここではこのような天界である、そこではそのような天界である、という天界の相違です。

それゆえ、だれかが天界の何らかの社会に上げられるとき、「天界に来る」と言われることがあります。またそこにいる者について、「天界の中にいる。それそれが自分の天界の中にいる」と言われることがあります——このことを来世にいるすべての者が知っています。それゆえ、天界の外または下に立つて、遠方から天使の集團を眺める者は、「天界がそこに、そしてまたあそこにある」と言います。

このことは、一つの王宮または一つの宮廷の中の長官・官吏・召使いにたとえられます。たとえ、自分の住まい、または自分の部屋に、ある者は上に、ある者は下に、別々に住んでいても、それでも一つの宮殿に、または一つの宮廷の中に、それぞれの者がそこで王に仕えるために自分の任務にいます。

ここから、次の主のことばによつて何が意味されるか明らかです、

父の家には多くの住まいがあります(ヨハネ一四・二)。

五一 それぞれの社会が小さい形の天界であることは、それぞれの社会の中に、全天界の中にあるような天界の形に似たものがあることからもまた明らかにすることができます——全天界の中で、他の者より秀でる者は真ん中にはいます、秀でることの少ない者は、その減少する順に、周囲に、辺境にまでいます、これは前章で見られるとおりです(四三番)。そしてまた、このことから、主は全天界の中にいるすべての者をあたかもひとりの天使であるかのように導き、同様に、それぞれの社会の中の者も導かれます——ここから、時々、天使の社会全体が天使の形でひとりの者のように現われます、このこともまた主により私に見ることが与えられました。

主もまた天使たちの真ん中に現れるとき、多くの者に取り囲まれてではなく、天使の形をしておひとりで現われます——ここから、主はみことばの中で天使と言われています。そしてまた社会全体も天使と言われます。ミカエル、ガブリエル、ラファエルは天使の社会以外のものではなく、その任務からこのように名づけられています*¹。

五三 社会全体が小さい形の天界であるように、天使もまた最小の形の天界です。なぜなら、天界は天使の外ではなく、彼の内にあるからです。というのは、心に属するものである天使の内的なものは、外にある天界のすべてのものを受容するために、天界の形に配列されているからです。それら外にあるものもまた、主から彼の中にある善の性質にしたがって受け入れます。ここから天使もまた天界です。

五四 「だれかの外に天界がある」と言うことは決してできません、天界は内にあります。すべての天使

は内にある天界にしたがつて、外にある天界を受け入れるからです。

ここから、「自分の内的ないのちがどんなものであつても、天界に入ることは、単に天使たちの間に上げられることがある。したがつて、直接の慈悲からだれにでも天界が与えられる」と信じる者は、どれほど欺かれているか明らかです*²。だれかの内に天界がないなら、外にある天界は決して流入しないし、受け入れられません。

このような見解を抱いた多くの靈がいました。そしてその信念ゆえに、天界へ上げられました。しかし、そのとき、彼らの内的ないのちは天使のいのちに反していたので、自分の知性に関して盲目になり始め、愚か者のようにまでもなり、自分の意志に関して気が狂うかのように振る舞つて苦しめられました——一言でいえば、悪く生きたのに天界へ来た者は、そこでは、水の外に出された大気中の魚のように、また、空気ボ

*1 みことばの中で、主は天使と言われる(六二八〇、六八三一、八一九二、九三〇三番)。

天使の社会の全体が天使と言われる。ミカエルとラファエルは機能からそのように言われる天使の社会である(八一九二番)。

天界の社会と天使たちに何も名前がない、しかし、善の性質から、またそれについての觀念から見分けられる(一七〇五、一七五四番)。

天界は直接の慈悲からではなく、生活(いのち)にしたがつて与えられる。主により人間が天界へと導かれる生活(いのち)のすべては、慈悲からのものであり、そのことが慈悲の意味である(五〇五七、一〇六五九番)。

もし天界が直接の慈悲から与えられるなら、それはすべての者に与えられるであろう(二四〇一番)。

天界から投げ落とされたある悪い者について、その者は天界がだれにでも直接の慈悲から与えられると信じていた(四二三六番)。

ンプで空気を抜き取り、エーテルの中に残された動物のように、あえぎ、苦しめられます。

ここから、天界はだれかの外になく、その者の内にあることを明らかにすることができます。^{*3}

五五 すべての者は、外にある天界を彼の内にある天界の性質にしたがつて受け入れます、それゆえ、同様に主を受け入れます、主の神性が天界をつくるからです——ここから、主がある社会の中に現在されるとき、その善の性質にしたがつて現われます。その善の中に社会は存在し、したがつて、ある社会と他の社会の中で同じように現在されることはありません——その同じでないことは、主にではなく、それぞれの善にしたがつてその方を見る者の側にあります。さらにまた、その方を自分の愛の性質にしたがつて見て、感動します。主を深く愛する者は、深く感動し、愛することの少ない者はそれほど感動しません。天界の外にいる悪い者は、その方の現在に苦しめられます。

主が何らかの社会に現われるとき、そこに「天使」のように現われます。しかし、他の天使とは光り輝く神性によつて区別されます。

五六 天界はまた、主が認められ、信じられ、愛されるところに存在します。ある社会や他の社会で善が多様であることから、その方への礼拝も多様であることは、害とはならないで、益となります。なぜなら、天界の完全性はこの多様性によるからです。

天界の完全性がこの多様性によることは、すなわち、個体が多様なものからどのようにして完全性をもつものに形作られるかは、学界で習慣的によく使われる表現を利用して、その助けによつて解釈されるのでなけれ

ば、理解されるように説明されることはほとんどできません——すべての個体は多様なものから存在するようになります、なぜなら、多様なものからでない個体は、何ものでもなく、形はなく、それゆえ、性質もないからです——けれども、個体が多様なものから存在するようになるとき、多様なものが完全な形の中に存在し、その中でどんなものでも、友のようにそれ自体を他の連続するものの中に一致させ、その時、完全な性質を持ちます——天界もまた、最も完全な形に整えられた多様なものからなる個体です。なぜなら、天界の形はすべての形の最も完全なものであるからです。

すべてのものの完全性がここからであることは、感覚と同じく心(*animus*)も感動させるすべての美しさ・楽しさ・快さから明らかです。なぜなら、それは、多くのものの和合と一致であつて、一致と調和から以外の、あるいは秩序の中でそれらが共存するか秩序の中で続くかする以外の、別の場所からは存在しない流れ出ないからであり、また一つのものからでなくて、多くのものからであるからです——ここから「変化は人を喜ばず」と言われ、喜びはその性質にしたがつていることが知られます。

これらから、天界の中でもまた、多様なものから完全性が存在することを、鏡の中のないように見ることができます。なぜなら、自然界の中に存在するものから靈界の中のものを鏡の中のないように見ることができるからです。^{*4}

五七 天界について言えるのと同様のことを教会について言うことができます、なぜなら、教会は地上の主の天界であるからです。

教会は多くありますが、それでもそれぞれが教会と呼ばれ、そこに愛と信仰の善が支配するかぎり教会です。さらにまた、主は天界でいろいろなものから一つのものをつくられるように、多くの教会から一つの教会をつくられます。^{*5}

全般的に教会について言えることは、教会の人間にも個別的に同様のことを言うことができます。すなわち、教会は人間の外でなく、内にあること、どんな人間も、その中に主が愛と信仰の善の中に現在されるなら、教会であることです。^{*6}

内に天界がある天使について言えるのと同様のことが、内に教会がある人間についても言えます、天使が最小の形の天界であるようにその人間が最小の形の教会であること——そのうえさらに、内に教会がある人間は、天使と等しく、天界です。なぜなら、人間は天界に来て、天使となるように創造されているからです。それゆえ、彼は、主からの善をもつ天世人間〔天使的な人間〕です。^{*7}

人間は天使と共通に何をもつか、また天使にまさつて何をもつか、記述することが許されています——人間が天使と共にもののは、その内的なものが等しく天界の映像となることです。人間が天使にまさつてもつものは、その外的なものが世の映像に応じて形作られていることです——善の中にいるほど、彼のもとにある世は、天界に従属させられ、天界に仕えます。その時、主は、ご自分の天界の中におられるかのように、彼のもとで両方の世界に現在されます。というのは、主は秩序であられるので、ご自分の神的な秩序の中のどちらの場所にもおられるからです。^{*8}

*4

すべての個体は、多くのものの調和と一致から存在する。そうでなければ、それに性質は存在しない(四五七番)。

ここから全天界は一つのものである(四五七番)。

また、このことは、そこのですべてのものが一つの目的を眺めていることからであり、その目的は主である(九八二八番)。

*5

もし善のない真理ではなくて、善が教会の特徴と本質的な部分となるなら、教会は一つとなる(一二八五、一三一六、二九八二、三三六七、三四四五、三四五一、三四五二番)。

さらにまた、すべての教会は善から主の前に一つの教会となっている(七三九六、九二七六番)。

*6

教会は人間の中になり、その外にはない。普遍的な教会は、その者の中に教会がある人間から存在する(三八八四番)。

*7

教会である人間は、最大の映像に応じた最小の形の天界である。心に属す彼の内的なものは天界的形に応じて配列され、ここから天界のすべてのものを受け入れることに応じて配列されているからである(九一一、一九〇〇、一九二八、三六二四、三六三二、三六三四、三八八四、四〇四一、四二七九、四五二三、四五二四、四六二五、六〇一三、六〇五七、九二七九、九六三二番)。

人間に内なるものと外なるものがあり、その内なるものは創造から天界的映像に応じて形作られており、またその外なるものは世の映像に応じて形作られており、ここから人間は古代人により小宇宙と言わた(四五二三、四五二四、五一五、六〇一三、六〇五七、九二七九、九七〇六、一〇一五六、一〇四七二番)。

それゆえ、人間は、彼のもとの世が天界に仕えるように創造された。さらにまたそのことは善い者のもとに生じる、しかし悪い者のもとでは逆である、そこでは天界が地に仕える(九二七八、九二八三番)。

神的善と神的真理は主から発出し、秩序をつくるので、主は秩序であられる(一七二八、一九一九、二〇一一、二五八、五一〇、五七〇三、八九八八、一〇三三六、一〇六一九番)。

*8

神的な真理は秩序の法則である(二三四七、七九五番)。

人間が秩序にしたがって生きれば生きるほど、そのように神的な真理にしたがって善の中に生きれば生きるほど、それだけ人間であり、彼の中に教会と天界がある(四八三九、六六〇五、八五一三番)。

五八 最後に、自分自身の中に天界をもつ者は、天界を自分の最大のものまたは全般的なものの中にもつだけでなく、自分の最小のものまたは個々のものの中にももち、その最小のものは、最大のものの映像を映し出していることを述べなくてはなりません。

このことは、それぞれの者が自分自身の愛であり、その支配愛のようなものとなつてること、この支配するもの〔愛〕が個々のものに流入し、それらを配列し、どこでも自分自身に類似のものをひき起すことに由来します^{*10}——天界では主への愛が支配しており、そこでは主がすべてにまさつて愛されるからです。ここから、主はそこのすべてのもののすべてであり、すべてと個々のものに流入し、それらを配列し、ご自分に類似のものを生じさせ、天界をそこにご自分がいるようにされています——ここから、天使は最小の形の天界であり、社会はさらに大きい形の天界、またすべての社会はひとまとめてにして最大の形の天界です。主の神性が天界をつくること、すべてのもののすべてであられること、これらは前に述べました(七〇一一番)。

*10

それぞれの者のもとで支配愛または支配的な愛は、彼のいのちのすべてと個々のものの中に、このように思考と意志のすべてと個々のものの中にある(六一五九、七六四八、八〇六七、八八五三番)。

人間は、彼のいのちを支配している性質のようなものとなつている(九一八、一〇四〇、一五六八、三五七〇、六五七一、六九三五、六九三八、八八五三、八八五八、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇、一〇二八四番)。

愛と信仰は、支配しているとき人間のいのちの個々のものの中にある。それでもそのことは知られていない(八八五四、八八六四、八八六五番)。

8 全天界は一つの統一体としてひとりの人間を表わす

五九

天界は全統一体としてひとりの人間を表わすことは、世にまだ知られていないアルカナ(秘義)です、けれども、天界ではきわめてよく知られています。このことを、そしてこのことについて特定的にまた個別的に知ることは、そこの天使の知性の主要なものです。それゆえ、多くのものが依存する全般的な原理のように、そのことを知らないくては、天使の心の観念に、区別された、はつきりとしたものは入ってきません。

天使は、"すべての天界がその社会とともにひとりの人間を表わす"と知つてゐるので、それゆえまた天界を"最大の神的の人"と呼んでいます^{*11}。神的と呼ぶのは、主の神性が天界をつくるからです(前の七〇一一番参照)。

六〇 靈的なものや天的なものについて正しい観念をもたない者は、天的で靈的なものが人間の形や映像の中に秩序づけられ、結合されていることを知覚することができません。彼らは、人間の最も外部のものを構成している地的なものや物質的なものが人間をつくつており、それらがなくては、人間は人間とならない、と考えています——しかし、人間はそれらのものから人間ではなく、真理を理解し、善を意志することができることから人間であり、これらは靈的なものと天的なものであつて、それらが人間をつくることを知らないままです。

さらにまた、人間はだれでも、どのような人間であるかは、理解力と意志に關してどのようにすることが知られています。そしてまた、人間の地的な身体は、世で理解力と意志に仕えるために、最も外部の自然の領域の中で理解力と意志の役立ちに一致して実行するように形作られていることも知ることができます。それゆえまた、身体は、それ自体からは決して行動しないで、人間が考えるものを何でも舌と口で語り、意志するものを何でも身体や四肢で行なうように、理解力と意志の意のままに従順であるように動かされます。そのように理解力と意志が行なつており、身体は、それ自体からは何も行ないません——ここから、意志と理解力が人間をつくり、それらが人間と似た形で存在することが明らかです、それらが、外なるものの中で内なるものが働いているように、意志と理解力が、身体の最も個々のものの中で働いているからです。それで、このことから人間は内なる人や靈的な人と呼ばれます。

最大のまた最も完全な形をしたこのような人間が天界です。

六一 人間について天使の觀念はこのようないます。それゆえ、天使は、人間が身体で行なうことには決して注目しないで、身体が行なうもとである意志に注目します——意志を人間自身と呼び、理解力はこれが意志と一つとなつて働くかぎり人間自身と呼びます。^{*2}

六二 全天界が天使のだれかの視野に落ち込むことはないで、確かに、天使は天界を全統一体のようない形として見ません、しかし時々、数千の天使たちから一つの形に構成されている社会を遠くから離れて見ることがあります。部分である社会から、普遍的な天界について結論しています。なぜなら、最も完全な形の中では、

共通なものは部分のようであり、部分は共通なもののようにあつて、相違は単に似たものの大引きものと小さいものの間のようであるからです。

ここから、彼らは、「神性はすべてのものを最内部から、最高のものから見るので、全天界は主の視野の中でこのような形です」と言っています。

六三 天界はこのような形であるので、それゆえまた、それは主によりひとりの人間のように、したがつて一つのもののように支配されています——なぜなら、たとえ人間が無数のいろいろなものから構成されていても、全体と同様に部分でも、全体としては四肢・器官・内臓から、部分としては纖維・神経・血管から、このように四肢の四肢から、部分の部分から構成されていても、それでも人間がある行動をするとき、それらは一つのように行動することがよく知られているからです——さらにまた、主の統制と導きの下で、天界はこのようなものです。

*2

人間の意志はそのいのちのエッセ(存在)そのものであり、理解力はそこからのいのちのエキシステレ(実在)である(三二六一九、五〇〇二、九二八二番)。

意志のいのちは、人間のいのちの主要なものであり、理解力のいのちはそこから発出する(五八五、五九〇、三六一九、七三四二、八八八五、九二八二、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇番)。

人間は、意志とそこからの理解力から人間である(八九一一、九〇六九、九〇七一、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇番)。

六四 人間の中の全部のいろいろなものが一つとして働くことは、そこには、共通の事柄に対しても行なわないもの、役立ちを果たさないものは何もないからです。共通なものはその部分のために役立ちを実行し、部分は共通なものの役立ちを果たします、なぜなら、共通なものは部分から構成され、部分は共通なものを作り、それゆえ、相互に供給し、互いに眺め合い、すべてと個々のものが共通なものとその善に関係するような形に結合されるからです。*「ここから、一つとして働くています。*

「**2**」天界の中の交わりもこれと似ています。天界では役立ちにしたがつて、似た形となつて結合されます。それゆえ、共同体の善を果たさない者は、異質であるとして天界から追い出されます。役立ちを果たす者は、公共(共通)の善のために、他の者によりよにと欲する者であり、役立ちを果たさない者は、公共(共通)の善のためではなく自分自身のために、他の者によりよにと欲する者です。後者はすべてのものにまさつて自分自身を愛する者ですが、前者はすべてのものにまさつて主を愛する者です——ここから、天界の中にいる者は一つとして働きますが、このことは自分自身からではなく主からです。彼らはその方を、すべてのもののもとである“唯一のもの”として、そしてその方の王国を、共同体のように、それに利益をはからなくてはならないものとして見ていてるからです。

このことが次の主のことばによつて意味されます、

最初に神の国とその義を求めなさい。そうすれば……すべてのものがあなたがたに加えられます(マタイ六・三三)。

「**その義を求める**こと」は、**その善を求める**ことです。³

「**3**」世で祖国の善を自分自身よりも愛し、隣人の善を自分自身のように愛した者は、来世で主の王国を愛し、求める者です、なぜなら、そこでは主の王国が祖国に代わるからです。自分自身のためでなく善のために、他の者に善を行なうことを愛する者は、隣人を愛します、なぜなら、そこでは善が隣人であるからです⁴——このような者はすべて、*“最大の人”*の中に、すなわち、天界にいます。

六五 全天界はひとりの人間を表わし、また最大の形と映像をした神的靈的(な)人間であるので、ここから天界は、人間のように四肢と部分に区別され、同じように名づけられています——さらにもう天使は、ある社会がどの四肢の中に、他の社会がどの四肢の中にあるか知つていて、「その社会は頭の部位または領域の中にあります。その社会は胸の部位または領域の中に、それは腰の部位または領域の中になります、等々」と言つています。

全般的に、最高または第三の天界は頭から首までを形作り、中間または第二の天界は胸から腰とひざまで

*3 みことばの中では、義(正義・公正)は善について、審判は真理について言われ、ここから義と審判を行なうことは善と真理を行なうことである(二三三五、九八五七番)。

*4 主は最高の意味で隣人であり、ここから主を愛することは、その方からのものすべての中に、したがつて善と真理の中に、その方がおられるので、その方からのものを愛することである(二四二五、三四一九、六七〇六、六七一一、六八一九、六八二三、八一二三番)。ここから、主からのすべての善は隣人であり、その善を意志し、行なうこととは隣人を愛することである(五〇三二八、一〇三三六番)。

を形作り——最外部または第一の天界は足から足の裏までを、また腕から指までを形作ります。なぜなら、腕と手は、身体の脇にあるにしても、人間の最外部であるからです。

ここから再び、なぜ三つの天界があるか、明らかです。

六六 天界の下にいる靈は、天界が上と同じく下にもあることを聞き、見るとき、非常に驚きます。なぜなら、天界は上以外の場所にはない、という世の人間と似た信仰と見解の中にいて、天界の位置が人間の中の四肢・器官・内臓の位置のよう、あるいは上に、あるいは下にあり、それぞの四肢・器官・内臓の中で、あるものは内に、あるものは外にあることを知らないからです。ここから、天界について彼らの観念は混乱しています。

六七 “最大の人”としての天界についてこれらのことと述べたのは、それらの先立つ知識なしに、これから続く天界についての觀念を決して把握することができないからです。天界の形・天界との主の結合・人間との天界の結合・靈界から自然界への流入について理解すること、また対応についても何らかの明確な觀念をまつたくもつことができないでしよう。それでもそれらについて、このあとで扱います。それで、これらのことと光を与えるために、このことを先に述べたのです。

9 天界のそれぞれの社会はひとりの人間を表わす

六八 私は、何度か、天界のそれぞれの社会もまたひとりの人間を表わし、人間の似姿であるのを見たことがあります。

光の天使を装うことを知っている多くの者が入り込んだ社会がありました。その装う者は偽善者でした。これらの者が天使から分離されつあるとき、私は、社会全体が最初に一つの暗いもののように見え、その後、暗いながらも徐々に人間の形となり、ついに光の中で人間のように見えました。

その人間の中にいて、その人間を構成した者は、その社会の善の中にいた者でした。その人間の中にいないで、構成しなかつた他の者は偽善者でした。後者は退けられ、前者は引き留められるようにして分離がなされました。

偽善者は、よいことを語り、よいことを行ないもしますが、しかしその個々のものの中では自分自身を眺める者です——主・天界・愛・天界の生活について、天使のようによいことを語り、よいことを行ないもしますが、それは、そのような者であると見られるためです——しかし、考えることは異なり、自分の語つていることを何も信じていませんし、自分以外の者のためには、何も善を欲しません。善を行なつても、自分自身のためです。もし他人のために行なうなら、見られるためであり、こうしてまた自分自身のためです。われることもまた見ることを与えられました。

六九 私は、主が現在してご自身を示されるとき、天使の社会全体がひとりの人間の形をした者として現

その社会は東に向かつて高いところに現われ、小さな星に囲まれて、白光りする色から赤くなつてゐる雲のように降りてきました。それは降りるまで徐々に輝きを増し、ついに完全な人間の形で見られました——雲の周囲の小さな星は天使たちであり、主からの光によりこのように見られたのでした。

七〇 たとえ天界の一つの社会の中にいるすべての者が、一緒にひとりの人間としてその似姿の中に現われる時でも、それでも、他の人間と似た人間がだれもいないように、他の社会と似た社会は一つもなく、一つの家庭の人間の顔のように互いに区別されることを知らなくてはなりません。その理由は前に述べたことと同じです（四七番）。すなわち、社会は、善の変化にしたがつて変化し、その善の中で、彼らは形作られます。

最内部または最高の天界の真ん中にある社会は、最も完全で最も美しい人間の形で現われます。

七一 天界の一つの社会の中で、一つとして働く者が多ければ多いほど、ますますその人間の形が完全になることは記しておく価値があります。なぜなら、前に示したように（五六番）、天界の形に配列された変化は完全性をつくり、変化は多くのものがあるところに存在するからです。

さらにまた、天界の社会は日々、数を増しています。また増すかぎり、さらに完全になります——こうして社会が完全になるだけでなく、社会が天界を構成するので、全般的に天界もまた完全になります。

天界は数の増加から完全なものになるので、天界は充満すると閉ざされる、と信じている者がどれほど欺かれているか明らかです。反対に、決して閉ざされることはなく、満たされれば満たされたほど、そのことから完全になります——それゆえ、彼らにとつて、新しい天使の訪問者がやつて來ること以上に望ましいもの

は何もありません。

七二 前章で示され、そこに見られるように、それぞれの社会が一緒に一つとして見られるとき人間の似姿であることは、全天界がその似姿を持つてゐるからです。天界の形のように最も完全な形をしたものは、部分が全体と類似し、また小さいものが最大のものと類似しています。天界の小さいものと部分は社会であり、それらから天界が構成され、それらはまた小さい形での天界であることは前に見られます（五一～五八番）。

このような類似は、天界の中のすべての善が一つの愛から、このように一つの起源から存在するので、永続します。そのすべての善が存在する起源である一つの愛とは、主への愛であり、それは主からのものです。ここから、全天界は全般的にその方に類似し、それぞれの社会はそれほど全般的ではなく、また、それぞの天使は特定的にその方に類似しています。

このこともまた前に見られ（五八番）、そこにこれらの事柄について言われていています。